

國學院大學學術情報リポジトリ

三重県鈴鹿市における用言の活用形のアクセント

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, はるか メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001443

三重県鈴鹿市における用言の活用形のアクセント

Declinable word's accent in Suzuka Mie

竹内 はるか

論文要旨

本稿では、三重県鈴鹿市における動詞・形容詞のアクセントを詳述する。豊富なバリエーションがみられるため、動詞の式の対立に着目して、典型的と考えられる二つのタイプに分けて報告を行う。二つのタイプとは式の対立がある A タイプ、式の対立が曖昧な AB タイプである。

A タイプ、AB タイプは式の対立の以外にも所属語彙で異なる特徴が観察される。A タイプは所属語彙も京都とほぼ同様に観察されるが AB タイプは、共通語アクセントで観察される語が多くみられる。

共通語化の影響がみられる AB タイプであるが、外的要因である共通語アクセント化が進んでいるのみではなく、京阪式アクセントの特徴の内的変化である式の対立が曖昧になるという相も観察される。このような変化が観察されるのは三重県が東西アクセントの境界地帯に位置し、関西からも、関東からもどちらからの影響も長期間にわたり、受け続けたからであると考えられる。(389字)

キーワード：

三重県鈴鹿市（ミエケンスズカシ）、動詞・形容詞のアクセント、式の対立（シキノタイリツ）、共通語化（キョウツウゴカ）、東西アクセントの境界地帯（トウザイアクセントノキョウカイチタイ）

1. はじめに

三重県は、服部（1930）の「近畿アクセントと東方アクセントとの境界線」や丹羽（2000）に述べられているように、県内部に東京式アクセントと京阪式アクセントの境界を持つ。また、その報告にあるように、本稿の調査地点である鈴鹿市は伝統的には京阪式のアクセントの地域である。しかし、鏡味（1998）や岸江（2001）などによると、伝統的には京阪式のアクセントであった三重県桑名市や四日市市のアクセントが若年層においては東京アクセントへ変化しているという報告がある。

三重県鈴鹿市の名詞アクセントについては、これまでに竹内（2015）で詳細な報告を行った。その際、京阪式の主たる特徴である長呼化の有無、高く始まるか低く始まるかでのアクセントの対立が保たれているかどうかという二つの要素で結果を分類した。その結果、当該地域の名詞アクセントは三つのタイプにわけることができた。高起式、低起式という式の対立のみに着目すると、その三つのタイプはそれぞれ式の対立がある A タイプ、曖昧である AB タイプ、対立がない B タイプと分けることができる。

本稿の目的は、式の対立の有無に着目して分類した用言の二つのタイプについて、音声実態を報告しそれぞれのタイプの解釈を行うことである。

鈴鹿市の用言は動詞アクセントについて式の対立に着目すると、典型的と考えられる二つのタイプに分けることができる。二つのタイプとは式の対立がある A タイプ、式の対立が曖昧な AB タイプである。

A タイプ、AB タイプは式の対立の他にも異なる特徴が観察される。A タイプはそれぞれの型における所属語彙もほぼ京都と同様に観察される。それに対し、AB タイプは、共通語アクセント化が大きく進んでいる様相が観察される。

特に AB タイプにおいて共通語アクセントで話される語がどれだけあるかについては個人差がみられる。そのような AB タイプであるが、外的変化である共通語アクセント化が進んでいるのみではなく、京阪式アクセントの特徴の内的変化である式の対立が曖昧になるという相も観察される。このような変化が観察されるのは三重県が東西アクセントの境界地帯に位置し、関西からも、関東からもどちらからの影響も長期間にわたり、受け続けたからであると考えられる。

2. 調査について

調査日は2008年9月から2016年8月で、調査は対面式で行った。動詞と形容詞は共通語での文例を示し、それを普段の言い方でどう言うかを尋ねる方法で行った。

話者は、15～86歳の鈴鹿市生え抜きの話者42名^{注1}で、調査語は、2拍から4拍の動詞と形容詞225語である。動詞は終止形、過去形、命令形、否定形、仮定形の5種類を中心に、形容詞は、終止形、連体形、仮定形、過去形の4種類を中心にそれぞれ調査した。本稿では特に、安定性が高いと考えられる終止形、過去形を中心に実態を報告する。

調査地点である三重県鈴鹿市の人口は20万282人（2016年6月30日）で、県北部に位置する。また、古くから東海道の要所として上方と江戸の行き来が盛んである。鈴鹿市内では1616年44番目の石薬師宿、1624年に45番目の庄野宿が設けられた。

現在の交通としては、公共の乗り物は近畿日本鉄道（近鉄）が主で、乗り換えを考えると大阪、京都へ出るよりは名古屋方面へ向かう方が容易である。ただし、市内には大きなショッピングモールがあり県内においては比較的繁華で、近年では県内の他市からでも遊びに行く場所といったイメージをもつ者も少なくない。特に若年においては県内から名古屋や大阪へ出ることは少なく、「遊びに行くならば鈴鹿市に行く」という話もよく耳にする^{注2}。



地図1 三重県地図

以下記号について、●は高く発音される拍を、○は低く発音される拍を示す。◎は中間的な高さを、～は異音の幅を示す。以下京都アクセントとしたものは平山（1960）、中井（2002）による。

3. 動詞のアクセントの詳述

鈴鹿市方言では京阪式アクセントの特徴である、語頭や文頭の始まりが高く始まるか、低く始まるかによって、音韻対立を示す。「式」の名称や定義については、池田要（1942）、和田 實（1957）、上野善道（1989）、川上葵（1997）などで扱われている。本稿では式を、文初頭の高さ、音調の方向の2点を扱うものとし、必ず高く始まり、アクセント核がくる

まで下がらないものを「高起式」、必ず低く始まり、アクセント核がある拍のみ高く発音するものを「低起式」とする。

高起式、低起式でアクセントの対立があるかどうかに着目して三重県鈴鹿市の動詞アクセントを分類すると、式の対立がある、式の対立が曖昧である、という二つのタイプに分けることができる。それぞれ A タイプ、AB タイプとする。

A タイプは、高起式、低起式の対立があるタイプである。このタイプは、ほぼすべての語において、所属語彙も京都アクセントと同様であった。ただし話者によっては一部共通語アクセント化で観察される語もある。A タイプは86歳から15歳までの32名で観察された。

AB タイプは高起式、低起式の対立が曖昧なタイプである。このタイプは、アクセントの型や所属語彙についても、必ずしも京都アクセントと同様ではなく、東京アクセントで観察される語がある。また、それぞれの型で観察される語は豊富なバリエーションがある。B タイプは27歳から15歳までの10名で観察された。

A タイプ … 式の対立がある。それぞれの型における所属語彙についても京阪式とほぼ同様である。

AB タイプ … 式の対立が曖昧。共通語アクセントで観察される語が多い。

3.1 式の対立がある A タイプ

A タイプは拍数、下がり目の位置にかかわらず式の対立がある。したがって、名詞では式の対立が失われやすい2拍目に下がり目が来る場合であっても式の対立がある。以下 A タイプのアクセントと具体語例について、Y.K (51) の結果を中心に報告する。ただし適宜他の話者も参考とする。

3.1.1 2拍動詞終止形・A タイプ

A タイプの終止形2拍の動詞のアクセントは以下の表1の通りである。

A タイプの3拍動詞終止形は三つの型が観察された。A タイプ①の話者はそれぞれの型に対する所属語彙が京都と同様のタイプ、A タイプ②とした話者は一部の語「会う」「編む」「打つ」などの語が (3) ●○の共通語アクセントで観察されるタイプである。(1) ●●～◎●は高起式で下がり目のない型、(2) ○●は低起式で下がり目のない型、(3) ●○は頭高型で観察される語である。(1) ●●～◎●で観察されるのは「行く」「産む」など1類の語である。●●～◎●と示したように話者によっては1拍目が少し低めに観察される場合もある。(2) ○●で観察されるのは、「会う」「編む」など主に2類の語である。

表1 2拍動詞・終止形・Aタイプのアクセントと語例

	Aタイプ①Y.K (51)	Aタイプ②S.H (82)
(1)●●～ ◎●	行く、産む、売る、追う、置く、押す、刈る、 聞く、汲む、消す、咲く、敷く、死ぬ、知る、 吸う、空く（スク）、散る、突く、継ぐ、積 む、釣る、飛ぶ、泣く、鳴る、塗る、抜く、乗 る、張る、引く、減る、巻く、揉む、止む、遣 る、言う（ユウ）、割る〈1類A〉	行く、産む、売る、追う、置く、押す、刈 る、聞く、汲む、消す、咲く、敷く、死ぬ、 知る、吸う、空く（スク）、散る、積む、釣 る、飛ぶ、泣く、鳴る、塗る、抜く、乗る、 張る、引く、減る、巻く、揉む、止む、遣 る、言う（ユウ）、割る〈1類A〉
	買う、拭く	買う、拭く
	着る、する、煮る、寝る〈1類B〉	着る、する、煮る、寝る〈1類B〉
(2)○●	添う、増す〈1類A〉	継ぐ、増す〈1類A〉
	会う、編む、打つ、書く、勝つ、噛む、切る、 食う、漕ぐ、刺す、住む、剃る、立つ、取る、 縫う、脱ぐ、練る、飲む、這う、吐く、吹く、 降る、乾す、掘る、蒔く、待つ、漏る、読む 〈2A類〉	書く、噛む、切る、食う、漕ぐ、刺す、住 む、剃る、立つ、取る、脱ぐ、練る、飲む、 這う、吹く、乾す、掘る、蒔く、待つ、漏る 〈2類A〉
	合う、着く、飼う	合う、着く、飼う
	来る、出る、見る〈2類B〉	
(3)●○	居る（オル）	居る
		添う〈1類A〉
		会う、編む、打つ、勝つ、縫う、降る、読む 〈2類A〉
		来る、出る、見る〈2類B〉

Aタイプ①で他の1類の語と異なり(2)○●で観察される1類の語「添う」、「増す」はどちらも京都で○●と観察される語である。

式の対立があるAタイプは(1)●●で発音される「行く」を(2)○●で発音することはない。したがって表にあるように「買う」と「飼う」といった同音異義語についても「買う」[●●]と「飼う」[○●]で明確に言い分けることができる。

3.1.2 2拍動詞過去形・Aタイプ

Aタイプ2拍動詞の過去形は以下の表2の通りである。

Aタイプの2拍動詞過去形は四つの型が観察された。活用の種類別にみると、五段活用では(4)、(5)、(6)の3拍語、三つの型の対立が、一段活用では(7)という2拍語一つの型が観察された。(4)●○○は頭高型、(5)○○●は低起式で下がり目のない型、(6)○●○は低起式で2拍目に下がり目がある型である。主に1類の語が(4)●○○で、2類の語が(5)○○●、(6)○●○で観察される。(6)○●○型で発音される語については話者によっては(5)○○●で発音される場合がある。たとえば74歳の話者、31歳の話

表2 2拍動詞・過去形・Aタイプのアクセントと語例

(4)●○○	行った、産んだ、売った、追った、置いた、押した、刈った、聞いた、汲んだ、消した、咲いた、敷いた、死んだ、知った、吸った、空いた（スイタ）、散った、突いた、継いだ、積んだ、釣った、飛んだ、泣いた、鳴った、塗った、抜いた、乗った、張った、引いた、減った、巻いた、揉んだ、止んだ、遣った、ユータ（言った）、割った〈1類A〉
	居った(オッタ)、拭いた
(5)○○●	添った〈1類A〉
	会った、編んだ、打った、勝った、噛んだ、切った、食った、立った、取った、縫った、練った、ホータ(這った)、降った、掘った、待った、漏った、読んだ〈2A類〉
	合った
(6)○●○	増した〈1類A〉
	書いた、漕いだ、刺した、住んだ、脱いだ、飲んだ、吐いた、吹いた、乾した、蒔いた〈2類A〉
	着いた
(7)●○	着た、した、煮た、寝た〈1類B〉
	来た、出た、見た〈2類〉

者などは(6)で観察される語が1語もなく、2類Aの語はすべて(5)○○●で観察された。Aタイプとした話者全体を通した傾向としては2A類については(6)より(5)○○●の方が多く観察される。また(6)で観察される語についてはイ音便の語が多いようである。

3.1.3 2拍動詞・五段活用の活用形アクセント

以下一段活用については否定形の種類が多く、まとめきれていないため稿を改めることとする。2拍動詞の五段活用の活用形アクセント^{注3}をまとめると以下の表3の通りである。(8)は終止形が高起式のもの、(9)は終止形が低起式のものが活用した場合をそれぞれ示している。否定形は「行く」を例にすると「イカン」「イカヘン」とそれぞれ「～ン」「～ヘン」が付いた場合、仮定形については「イケバ」と「～バ」と発音した場合のアクセントを示している。

Aタイプは表3のように、たとえば終止形が同じアクセントで観察される場合、その他の活用形でも同じアクセントで観察される。(8)で観察されるのは1類、(9)で観察されるのは2類の語が中心である。

表3 2拍動詞（五段活用）の活用形アクセント

	終止形	過去	命令	否定		假定
		タ		ン	ヘン	バ
(8)	●●●～◎●●	●○○	●○	●●●	●○○○	●○○
例：行く	イク	イッタ	イケ	イカン	イカヘン	イケバ
(9)	○●	○○●	○●	○○●	○●○○	○●○
例：書く	カク	○●○ カイタ	カケ	カカン	カカヘン	カケバ

3.1.4 3拍動詞終止形・Aタイプ

Aタイプ3拍動詞の終止形は以下の表4の通りである。

表4 3拍動詞・終止形・Aタイプのアクセントと語例

(1) ●●●	上がる、当てる、浮かぶ、歌う、送る、飾る、変わる、嫌う、削る、探す、探る、沈む、慕う、進む、並ぶ、握る、運ぶ、巡る、譲る〈1類A〉
	明ける、植える、借りる、消える、捨てる、染める、腫れる、負ける、燃える〈1類B〉
	余る、祈る、祝う、動く、移る、恨む、選ぶ、起こす、落とす、思う、帰る、乾く、崩す、砕く、曇る、縛る、叩く、違う、作る、包む、詰まる、照らす、懐く、習う、憎む、濁る、ひがむ、光る、許す〈2類A〉
(2) ○○●	遊ぶ〈1類A〉
	歩く、隠す〈3類〉
(3) ○●○	生きる、起きる、落ちる、掛ける、覚める、建てる、付ける、溶ける、撫でる、逃げる、晴れる〈2類B〉
	入る〈3類〉
(4) ●○○	注：話者Y.K.には観察されなかったが、他のAタイプ話者には観察される型（観察される語例は少ない）

Aタイプの3拍動詞終止形は四つの型が観察された。(1) ●●●は高起式で下がり目のない型、(2) ○○●は低起式で下がり目のない型、(3) ○●○は低起式で2拍目に下がり目がある型、(4) ●○○は頭高型である。今回中心とした話者Y.K.においては(4)で

観察される語はなかったが、「帰る（2類A）」「入る（3類）」が（4）の頭高型で観察される話者もいた。（4）の頭高型で観察されるのはいずれも東京で頭高型アクセントになるもので、共通語アクセントの影響で（4）の頭高型が観察されると考えられる。

（1）で観察されるのは主に1類の語、2類Aの語である。（2）で観察されるのは主に3類の語である。（3）で観察されるのは主に2類Bの語である。○●○型で観察される2類Bについては、○○●型となる京都アクセントとは異なるが、丹羽（2000）にあるように三重県鈴鹿市においては伝統的に○●○型で観察される。

Aタイプは（1）●●●と（2）○○●で音韻的対立をなす。（1）は必ず高く始まらなければならず（2）は必ず低く始まらなければならない。

3.1.5 3拍動詞過去形・Aタイプ

Aタイプ3拍動詞の過去形は以下の表5の通りである

表5 3拍動詞・過去形・Aタイプのアクセントと語例

(5) ●○○○	上がった、当たった、歌った、送った、飾った、 変わった、嫌った、削った、探した、探った、 慕った、握った、巡った、譲った〈1類A〉
	余った、祈った、祝った、落とした、思った、 帰った、崩した、曇った、縛った、違った、作っ た、包んだ、詰まった、照らした、懷いた、習っ た、濁った、光った〈2類A〉
(6) ●●○○	浮かんだ、沈んだ、進んだ、並んだ、運んだ〈1 類A〉
	動いた、恨んだ、選んだ、起こした、乾いた、碎 いた、叩いた、憎んだ、ひがんだ、許した〈2類 A〉
(7) ○●○○	遊んだ〈1類A〉
	歩いた、隠した、入った〈3類〉
(8) ●○○	明けた、植えた、借りた、消えた、捨てた、染め た、腫れた、負けた、燃えた〈1類B〉

Aタイプの3拍動詞過去形は四つの型が観察された。活用の種類別にみると、五段活用では（5）、（6）、（7）の4拍語に三つの型の対立が、一段活用では（8）●○○という3拍語一つの型が観察された。（5）●○○○は頭高型、（6）●●○○は高起式で2拍目に下がり目がある型、（7）○●○○は低起式で2拍目に下がり目がある型である。

伝統的な京都アクセントは1類A、2類Aともに（5）●○○○、3類が○●○○で観

察される。今回の鈴鹿市調査では1類A、2類Aがそれぞれ(5)と(6)の型で観察された。どの語が(5)、(6)のどちらで観察されるかは個人差があるが、Aタイプ全話者をとおして1類、2類の語は(5)頭高型が優勢な型であった。(7)で観察されるのは主に3類の語である。

竹内(2015)で述べたように、三重県鈴鹿市の名詞アクセントでは、2拍目に下がり目がある場合の式の対立が保たれにくい。しかしAタイプでは(6)と(7)をみるとわかるように、たとえば「歩いた」を「アルイタ」(7) ○●○○とせず(6) ●●○○と発音することはできない。このようにAタイプは、2拍目に下がり目がある場合でも対立を保っている。

3.1.6 3拍動詞・五段活用の活用形アクセント

3拍動詞の五段活用の活用形アクセントをまとめると以下の表6の通りになる。(9)は終止形が高起式のものの、(10)は終止形が低起式のものが活用した場合をそれぞれ示している。

表6 3拍動詞（五段活用）の活用形アクセント

	終止形	過去	命令	否定		仮定
		タ		ン	ヘン	バ
(9) 例：上がる	●●●	●○○○ ●●○○○	●○○ ●●○	●●●●	●○○○○ ●●○○○	●●○○
	アガル	アガッタ	アガレ	アガラン	アガラヘン	アガレバ
	(10) 例：遊ぶ	○○●	○●○○	○○○●	○●○○○	○●○○
	アソブ	アソンダ	アソベ	アソバン	アソバヘン	アソベバ

3.1.5で述べたように(9)で観察されるのは1類、2類の語、(10)で観察されるのは3類の語が主である。1類、2類の高起式の語で下がり目があるアクセントで観察される場合、どの語が1拍目に下がり目があり、どの語が2拍目に下がり目があるかは個人差があるが、1拍目に下がり目のある型がいずれの活用形でも優勢である。

3.1.7 4拍動詞終止形・Aタイプ

Aタイプ4拍動詞の終止形は以下の表7の通りである

Aタイプの4拍動詞終止形は二つの型が観察された。(1) ●●●●は高起式で下がり目のない型、(2)は低起式で下がり目のない型である。それぞれの所属語彙は京都アクセントと同様になっている。このように(1)と(2)はそれぞれ式の対立のみで語を弁別することができる。このように拍数が多くなってもAタイプは式の対立がある。

表7 4拍動詞・終止形・Aタイプのアクセントと語例

(1) ●●●●	嘲る、伺う、疑う、悲しむ、従う、養う〈1類A〉
	与える、重ねる、並べる、始める〈1類B〉
	表す、驚く、喜ぶ〈2類A〉
	集める、数える、調べる、助ける、流れる、離れる〈2類B〉
(2) ○○○●	隠れる〈2類B〉

3.1.6 4拍動詞過去形・Aタイプ

表8 4拍動詞・過去形・Aタイプのアクセントと語例

(3) ●●●○○	嘲った、伺った、疑った、悲しんだ、従った、 養った〈1類A〉
(4) ○●○○	隠れた〈2類B〉
(5) ●●○○	与えた、重ねた、並べた、始めた〈1類B〉
	集めた、数えた、調べた、助けた、流れた、離 れた〈2類B〉

Aタイプの3拍動詞過去形は三つの型が観察された。活用の種類別にみると、五段活用では5拍語(3)という一つの型が、一段活用では(4)と(5)という4拍語に二つの型の対立が観察された。(3) ●●●○○は高起式で3拍目に下がり目のある型、(4) ○●○○は低起式で2拍目に下がり目のある型、(5) は高起式で2拍目に下がり目のある型である。それぞれの型の所属語彙は伝統的な京都と同様である。ただし(4)で観察された「隠れた」については、○○●○と下がり目が1拍遅く観察される話者もいた。

表8(4)、(5)をみるとわかるように2拍目に下がり目がある場合についても、Aタイプは高起式、低起式の対立がある。

五段活用の4拍動詞においては観察される型は1種類である。活用形のアクセントは以下の表9の通りである。

表9 4拍動詞(五段活用)の活用形アクセント

	終止形	過去	命令	否定		假定
		タ		ン	ヘン	バ
(6)	●●●●	●●●○○	●●●○	●●●●●	●●●○○○	●●●○○
例：疑う	ウタガウ	ウタガッタ	ウタガエ	ウタガワン	ウタガワヘン	ウタガエバ

以上より A タイプの動詞の結果をまとめると、以下の三つの特徴があげられる。

- 1) 拍数が増えても式の対立が保たれる
- 2) 下がり目の位置がどこであっても式の対立は保たれる。
- 3) 所属語彙は京都とほぼ同じ様相を示す。(共通語アクセントの影響が少ない)

3.2 式の対立が曖昧な AB タイプ

AB タイプは共通語アクセントの影響が大きくみられる。それぞれのアクセント型の所属語彙については個人によって様々なバリエーションが観察される。A タイプとは異なり、活用形のアクセントも、たとえば終止形が高起式であるから他の活用形はこのアクセントになると予測をつけることが困難である。このような複雑な様相を示す AB タイプであるが、変化の中にあるためか伝統的な京都アクセントとも、共通語アクセントとも異なるアクセントで観察される語もみられた。

本稿では以下 S.T (27) を中心に AB タイプのアクセントの具体例を詳述する。

3.2.1 2 拍動詞終止形・AB タイプ

AB タイプにおける 2 拍動詞終止形のアクセントと語例は以下の表10の通りである。

AB タイプの 2 拍動詞終止形は三つの型が観察された。(1) ◎●～●●は高く始まり下がり目のない型である。(2) ○●は低起式で下がり目のない型である。(4) ●○は頭高型の発音である。

表10 2 拍動詞・終止形・AB タイプのアクセントと語例

(1) ●●～◎●	行く、産む、売る、追う、置く、押す、刈る、聞く、汲む、消す、咲く、敷く、死ぬ、知る、吸う、空く(スク)、散る、積む、釣る、飛ぶ、泣く、鳴る、塗る、抜く、乗る、張る、引く、減る、揉む、止む、遣る、言う(ユウ)、割る〈1類A〉
	拭く
	着る、する、煮る、寝る〈1類B〉
(2) ○●	継ぐ、増す〈1類A〉
	書く、噛む、切る、食う、漕ぐ、刺す、住む、剃る、立つ、取る、脱ぐ、練る、飲む、這う、吹く、乾す、掘る、待つ、漏る〈2類A〉
	合う、着く
(3) ●●～◎●～○●	巻く〈1類A〉、蒔く〈2類〉
	買う、飼う
(4) ●○	添う〈1類A〉
	会う、編む、打つ、勝つ、縫う、降る、読む〈2類A〉
	来る、出る、見る〈2類B〉
	居る

Aタイプと異なるのは(3)で観察されるもので、下がり目がなければ1拍目の高さは高くても低くてもよいという語があることである。特に同音異義語にそうなる傾向があり、ABタイプとした話者全員が、伝統的には高起式か低起式かで言い分けられる同音異義語の一部を言い分けられないという結果が観察された。

さらに話者 AB タイプの話者 2 人においては、1 類の語がすべて●●～◎●～○●と 1 拍目の高さで型の対立がなくなっていた。その 2 人においては 2 類の語は、●●～◎●～○●で観察される「会う」、「蒔く」など一部の語を除き●○型で観察されるため、他の AB タイプの話者より共通語アクセント化が進んでいるといえる。

ただし、AB タイプの多くの話者において、型の知覚としては完全に区別がなくなっているわけではなく、表10の(1) ●●～◎●で発音する「行く」などの語を(2) ○●の型で発音することはないという内省も聞かれた。

また、2 拍動詞の終止形において、(3) ●○の頭高型で発音される 2 類の語が多いことも AB タイプの特徴である。京都アクセントと同様であれば 2 類の語は(2) ○●で観察される。しかし、2 類の語で(2)で発音される語があるなかで(3) ●○と東京と同じアクセントで観察される語も多くみられるのがこのタイプの特徴である。

3.2.2 2 拍動詞過去形・AB タイプ

AB タイプにおける 2 拍動詞過去形のアクセントと語例は以下の表11の通りである。

表11 2 拍動詞・過去形・AB タイプのアクセントと語例

(5) ◎●●～ ●●●	行った、汲んだ〈1類A〉 買った
(6) ●○○	産んだ、売った、追った、置いた、押した、刈った、聞いた、消した、咲いた、敷いた、死んだ、知った、吸った、空いた(スイタ)、散った、突いた、継いだ、積んだ、釣った、飛んだ、泣いた、鳴った、塗った、抜いた、乗った、張った、引いた、減った、巻いた、増した、揉んだ、止んだ、遣った、言った、割った〈1類A〉 会った、編んだ、打った、勝った、書いた、切った、住んだ、縫った、練った、吐いた、降った、読んだ〈2A類〉 居った(オッタ)、拭いた
(7) ○○●	増した〈1類A〉 噛んだ、切った、食った、漕いだ、刺した、剃った、立った、取った、脱いだ、飲んだ、這った、掘った、待った、漏った〈2A類〉 合った、着いた
(8) ○●○	蒔いた〈2類A〉
(9) ●○	着た、した、煮た、寝た〈1類B〉 来た、出た、見た〈2類B〉

AB タイプの2拍動詞過去形は五つの型が観察された。活用の種類別にみると、五段活用では3拍語(5)、(6)、(7)、(8)の四つの型が、一段活用では(9)という2拍語一つの型が観察された。(5)は◎●●～●●●という高起式で下がり目がない型と同じように発音しても、1拍目が若干緩んでもよいという、1拍目の高さに関わらず下がり目のない平板型、(6)●○○は頭高型、(7)○○●は低起式で下がり目のない型、(8)○●○は1拍目が低く観察される中高型、(9)●○は頭高型で観察された。

(5)で観察される1類の語や、(6)で観察される2類の語は、東京アクセントの影響を受け、共通語アクセント化を取り入れたものであると考えられる。1類Aの語ほとんどを(5)のように発音する話者も観察された。

(5)と(7)は明確に区別されており、(7)は3拍目までは必ず低く続かなければならず高起式と低起式の対立は保たれているといえる。ただし、話者によってはAタイプで●●●と観察される「巻いた」「塗った」などを○○●と発音する人もおり、高起式と低起式の対立が曖昧になっていることがうかがえる。

3.2.3 3拍動詞終止形・Bタイプ

ABタイプにおける3拍動詞終止形のアクセントと語例は以下の表12の通りである。

表12 3拍動詞・終止形・ABタイプのアクセントと語例

(1)◎●●～ ●●●	当てる、浮かぶ、歌う、送る、飾る、変わる、嫌う、削る、探す、探る、沈む、慕う、進む、並ぶ、握る、運ぶ、巡る、譲る〈1類A〉
	明ける、植える、借りる、捨てる、染める、腫れる、負ける、燃える〈1類B〉
	違う、照らす〈2類A〉
(2)○○●	
(3)○●○	遊ぶ〈1類A〉
	余る、祈る、祝う、動く、移る、恨む、選ぶ、起こす、落とす、思う、乾く、崩す、砕く、曇る、縛る、叩く、頼む、作る、包む、詰まる、懐く、習う、憎む、濁る、ひがむ、光る、許す〈2類A〉
	生きる、起きる、落ちる、掛ける、覚める、建てる、付ける、溶ける、撫でる、逃げる、腫れる〈2類B〉
	歩く、隠す〈3類〉
(4)●○○	帰る〈2類A〉
	入る〈3類〉

AB タイプの3拍動詞における終止形は四つの型が観察された。(1) は高起式で下がり目がない型と同じように発音しても、1拍目が若干緩んでもよいという、1拍目の高さに関わらず下がり目のない平板型、(2) は低起式で下がり目のない型、(3) ○●○は低起式で2拍目に下がり目のある型、(4) ●○○は頭高型で観察される。

ただし、3拍動詞の終止形において(2)の低起式で下がり目のない型が観察される話者は3人であり、今回詳述したS.Tのように観察されない話者が多かった。(2)で観察された語としては「遊ぶ」1語のみであった。

これらをみるとわかるように、3拍動詞の終止形は、2拍動詞に比べ共通語アクセント化が進んでいるといえる。

3.2.4 3拍動詞過去形・ABタイプ

ABタイプにおける3拍動詞終止形のアクセントと語例は以下の表13の通りである。

ABタイプの3拍動詞における過去形は六つの型が観察された。活用の種類別にみると、五段活用では4拍語(5)、(6)、(7)三つの型が、一段活用では(8)●●●～◎●●、(9)●○○、そして○●○という3拍語三つの型が観察された。(5)●○○○は頭高型、(6)

表13 3拍動詞・過去形・ABタイプのアクセントと語例

(5)●○○○	上がった、当たった、歌った、送った、飾った、変わった〈1類A〉
	帰った〈2類A〉
	入った〈3類〉
(6)○●○○	遊んだ、浮かんだ〈1類〉
	余った、祈った、祝った、動いた、移った、恨んだ、選んだ、落とした、思った、崩した、曇った、縛った、頼んだ、違った、作った、包んだ、詰まった、照らした、懷いた、習った、濁った、光った〈2類A〉
	歩いた、隠した〈3類〉
(7)●●●●～◎●●●	嫌った、削った、探した、探った、慕った、沈んだ、進んだ、並んだ、握った、運んだ、巡った、譲った〈1類A〉
	違った〈2類A〉
(8)●●●～◎●●	借りた、消えた、捨てた、染めた、腫れた、燃えた〈1類B〉
(9)●○○	明けた〈1類B〉
	生きた、掛けた、覚めた、建てた、付けた、溶けた、撫でた、逃げた、晴れた〈2類B〉
(10)●○○～○●○	植えた〈1類B〉

○●○○は低起式で2拍目に下がり目のある型、(7)、(8)は高起式で下がり目のない型、(9) ●○○は頭高型で観察される。(10)は頭高型から中高型の幅でゆれが観察される。ABタイプの話者全員において、○●○のアクセントのみで観察される語は観察されなかった。

表13をみるとわかるように、どの話者においても、1類の語は一部が伝統的な●○○○型で観察されるものの、(7)のように共通語アクセントと同様の下がり目のない型で観察される語が多くなっていた。

3.2.5 4拍動詞終止形・ABタイプ

ABタイプにおける4拍動詞終止形のアクセントと語例は以下の表14の通りである。

表14 4拍動詞・終止形・ABタイプのアクセントと語例

(1)◎●●● ~●●●●	伺う、疑う、従う〈1類A〉
	与える、重ねる、並べる、始める〈1類B〉
	表す〈2類A〉
(2)◎●●○ ~○●●○	嘲る、悲しむ、養う〈1類A〉
	驚く、喜ぶ〈2類A〉
	集める、数える、調べる、助ける、流れる、 離れる、隠れる〈2類B〉

ABタイプの3拍動詞における終止形は二つの型が観察された。(1)は高起式で下がり目のない型、(2)は3拍目に下がり目のある型である。ただし1拍目の高さは低くても高くても、その中間であってもよい。すなわち、下がり目の位置が3拍目にあればよいという型である。(2)は京都における4拍動詞終止形では観察されない語であり、共通語アクセント化の影響があらわれたものと考えられる。

3.2.6 4拍動詞過去形・ABタイプ

ABタイプにおける4拍動詞過去形のアクセントと語例は以下の表15の通りである。

ABタイプの4拍動詞における過去形は五つの型が観察された。活用の種類別にみると、五段活用では5拍語(3)、(4)二つの型が、一段活用では(5)、(6)、(7)という4拍語三つの型が観察された。(3)は1拍目の高さは高くても低くてもよいが3拍目に下がり目がくる型、(4)は(3)と同じく1拍目の高さは高くても低くてもよく、下がり目のない型、(5)は高く始まって2拍目に下がり目のある型、(6)は下がり目のない型、(7)は1拍目は低く、2拍目からあがり3拍目に下がり目のある型である。

五段活用の過去形(3)、(4)をみると、1拍目の高さは緩んだりして観察されるものの

表15 4拍動詞・過去形・ABタイプのアクセントと語例

(3) ●●●○○～◎●●○○～ ○○●●○○	嘲った、伺った、悲しんだ、養った 〈1類A〉
(4) ●●●●●●～◎●●●●● ～○○●●●●	表した、驚いた、喜んだ 〈2類A〉
(5) ●●○○	疑った、従った 〈1類A〉
(6) ●●●●～◎●●●	集めた、数えた、調べた、流れた、離れた、隠れた 〈2類B〉
(7) ○●●○	与えた、重ねた、並べた、始めた 〈1類B〉
(7) ○●●○	助けた 〈2類B〉

1類は伝統的な京都アクセントを保った(3)と共通語アクセント化の影響を受けたと考えられる(4)で観察される。それに対して2類の語は伝統的な京都アクセントと東京アクセントともに下がり目は3拍目にある。したがって、2類の語が共通語アクセント化しているかどうかの考察は今後の課題としたい。

一段活用 of 過去形においては(5)は1拍目は必ず高く発音される。○●○○とは異なるという話者の知覚があり、同じくABタイプの3拍動詞の「遊んだ」「祈った」○●○○とは異なって観察される。

以上よりABタイプの動詞の結果をまとめると、以下の二つの特徴があげられる。

- 1) 式の対立が曖昧になっている語と、共通語アクセントの影響を受けた語が混在している。
- 2) 拍数が多いほど共通語アクセントの影響が大きくみられる

5.2 形容詞・終止形のアクセント

形容詞の伝統的な京都アクセントは観察される型の数が少なく、高く始まるか低く始まるかというアクセントの対立はない。ただし、動詞において高く始まるか低く始まるかの対立の有無で分類した場合、形容詞においてもAタイプとABタイプでそれぞれ異なる特徴が観察された。先に述べたように、調査した話者のほとんどが、伝統的な三重県鈴鹿市方言のアクセント^{注5}を保つAタイプに分類される。形容詞は伝統的に観察される型の数も少ないためかAタイプ、ABタイプともに所属語彙も安定して観察された。

Aタイプの4拍の語においては、高く始まるか低く始まるかの対立がみられる。ただし○○●○で観察されるのは今回調査した語の中では「おいしい」の一語のみであった。

AB タイプは伝統的な鈴鹿市のアクセントと大きく異なる結果が観察された。終止形は拍数にかかわらず後ろから2拍目に下がり目のある型に統合されつつあると考えられる。

表16
形容詞・終止形アクセントと語例

A タイプ		
2拍	(1) ○●	無い、良い
	(2) ●○	濃い
3拍	(3) ●○○	赤い、浅い、厚い、甘い、荒い、薄い、遅い、重い、堅い、軽い、暗い、遠い<1類>
		熱い、多い、黒い、白い、高い、近い、高い、強い、長い、早い、低い、深い、古い、弱い<2類>
4拍	(4) ●●●○	悲しい、尊い、空しい<1類>
		詳しい、親しい、涼しい、正しい、等しい<2類>
	(5) ○○●○	おいしい

表17
形容詞・終止形アクセントと語例

AB タイプ		
2拍	(6) ○●	無い
	(7) ●○	濃い、良い
3拍	(8) ○●○	赤い、浅い、厚い、甘い、荒い、薄い、遅い、重い、堅い、軽い、暗い、遠い<1類>
		熱い、多い、黒い、白い、高い、近い、高い、強い、長い、早い、低い、深い、古い、弱い<2類>
4拍	(9) ○●●○	悲しい、尊い、空しい<1類>
		詳しい、親しい、涼しい、正しい、等しい<2類>
		おいしい

5. 鈴鹿市における用言のアクセント体系の解釈

鈴鹿市における式の対立と品詞、年齢の関係を示したのが以下の表18である。

表18 式の対立と品詞の関係

名詞	ある (86～49歳)	あいまい (81～15歳)	ない (16～15歳)
動詞	ある (86～15歳)		あいまい (27～15歳)

表18をみるとわかるように、名詞と比べ動詞において式の対立がある話者が多い。また、動詞において式の対立が全く失われている話者というのは、執筆者のこれまで調査では観察されていない。

三重県鈴鹿市の動詞アクセントを解釈する際、式の対立でみると大きく三つのタイプに解釈することができる。

- ①式の対立と下がり目の位置で解釈できる A タイプ
- ②拍数、型によって解釈の仕方が異なる AB タイプ

③下がり目の位置のみで解釈できる B タイプ

Aタイプ	「○○	「○○○	「○○○○
	「○」○	「○」○○	「○」○○○
		「○○」○	「○○」○○
			「○○○」○
			「○○○○」
	「○○	「○○○	「○○○○
	「○○」	「○○」○	「○○」○○
		「○○○」	「○○○○」○
Bタイプ	○○	○○○	○○○○
	○」○	○」○○	○」○○○
		○○」○	○○」○○
			○○○」○
			○○○○」

「	高起式
」	低起式
○	下がり目

図 1

先に述べたように A タイプは式と下がり目の位置で解釈ができるタイプである。伝統的な京阪式の体系をもつのが、A タイプであると考えられる。

これまでの調査から、式の対立が全くないという相は観察されていない。特に品詞別にみると、動詞における式の対立は保たれやすい。

ただし、用言において式の対立が曖昧とした AB タイプの中には、数語のみ式の対立が保たれている語が観察されたものの、ほとんどの語において式の対立が失われている話者も観察された。たとえば「ホル（捨てる）」と「掘る」は [◎●～●●] と [○●] で明確に異なるとしながらも「会う」を [○●～◎●～●●] と発音するなど、式の対立が失われている語がほとんどである話者もいたことから式の対立がない B タイプという体系があると解釈した。それらの話者は名詞においては式の対立が失われ、所属語彙なども東京アクセントと同じに観察された。このように用言の AB タイプのなかでも式の対立の保たれ方には個人差が大きくみられる。

6. おわりに

今回は動詞の終止形、過去形、形容詞の終止形を中心に、式の対立に着目して、式の対立がある A タイプ、式の対立が曖昧な AB タイプにわけてそれぞれの音声実態の記述を行った。

A タイプ、AB タイプは式の対立の以外でも異なる特徴が観察される。A タイプは所属語彙も京阪式の体系を保っているが、AB タイプは、一部の語で共通語アクセント化が見られる。また、所属語彙も含め東京アクセントと同じ体系を持つ話者も 2 人ではあるが観

察された。このように、ABタイプにおいて共通語アクセントで話される語がどれだけあるかについては個人差がみられる。そのようなABタイプであるが、外的変化である共通語アクセント化が進んでいるのみではなく、京阪式アクセントの特徴の内的変化である式の対立が曖昧になるという相が観察される。このような変化は三重県が東西アクセントの境界地帯に位置し、関西からも、関東からもどちらからの影響も長期間にわたり、受け続けたからであると考えられる。今後は名詞、用言をあわせたABタイプも合わせた体系の解釈を行いたい。

注記

注1：話者は計42名。以下用言のタイプで分類すると以下の通りになる。年齢は調査時年齢とする。

Aタイプ：33名

神戸 H.O (86)・S.H (81)・M.S (78)・C.S (76-80)・Y.K (75-79)・M.N (75)・K.K (72)・H.T (61)・Y.K (49-51)・H.T (24-28)・M.H (23)・Y.Y (23)・S.T (21-25)・M.G (17)・Y.E (16)、寺家町 K.U (53)・R.I (16)・Y.K (16)・Y.K (16)、平田町 K.I (28)、北江島町 R.N (15)、江島町 M.H (16)、白子町 Y.K (16)・R.M (16)・K.K (16)・R.F (15)・K.H (15)、安塚町 E.S (15)・H.T (24-28)、野町東 K.I (19)、南玉垣 K.A (21)、木田町 F.T (75)・M.T (75)

ABタイプ：9名

阿古曾 A.I (19)・国分町 M.N (16)、野辺町 M.N (16)・T.T (16)、神戸・K.M (16)・H.J (16)・N.S (16)・H.A (16)・A.N (15)

注2：2015年3月～7月に三重県出身・在住の大学生44名にアクセント調査を行った。その際「友達と遊び、もしくは買い物にいくならどこか」という質問をしたところ、40名が県内からほぼ出ていかないと回答した。県内からほぼ出ていかないと答えた40名のうち、自分の住んでいる市内に行くという回答を除くと鈴鹿市に遊びに行くという回答が最も多かった。

注3：一段活用については過去形、否定形において拍数が異なる。また、一段活用の否定形は「ン」「ヘン」の他に「ヤン」「ヤヘン」なども観察されるが、それぞれ使用しない語形が話者によって異なるため稿を改めて述べる。また高起式、低起式の対立を示すために例外となる「居る」についても表から省いた。

注4：Aタイプの動詞のアクセントは、京都と全く同じというわけではない。伝統的な三重県鈴鹿市の動詞アクセントは、丹羽（2000）にあるように京都アクセントと少し異なる。具体的には、3拍動詞終止形において、京都では二つの型に分かれるものが、鈴鹿市では三つの型に分かれる。

注5：動詞と同様、形容詞の伝統的な型は京都と少し異なる。具体的には佐藤（1982）にあるように、当該地域の4拍形容詞においては、伝統的には3種類の型があり、京都アクセントにおいて終止形で●●○○と観察されるものが鈴鹿市では伝統的に●●●○で観察される。

参考文献

- 榎垣実（1962）「三重県方言」『近畿方言の総合的研究』榎垣実編 三省堂
- 池田要（1942）「近畿アクセント形式観の問題」『日本語のアクセント』中央公論社
- 上野善道（1989）「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻（上）』
- 鏡味明克・新良智子・岩田千晶・小野田良香（1998）「三重県アクセントの年層変化 ―松阪・四日市・桑名および桑名周辺について―」『名古屋・方言研究会会報』第15号
- 川上蓁（1997）「高さアクセントの記述一段、向き、契機、核など―」『音声研究』第1巻第2号 日本音声学会
- 佐藤虎男（1982）「三重県の方言」『講座方言学7―近畿地方の方言』国書刊行会
- 竹内はるか（2015）「三重県鈴鹿市のアクセントの研究」『國學院大學大学院紀要－文学研究科－』第46輯
- 中井幸比古（2002）『京阪系アクセント辞典』勉誠出版
- 中井幸比古（2003）「アクセントの変遷」『朝倉日本語講座3 音声・音韻』朝倉書院
- 西宮一民（1961）「方言の実態と共通語化の問題点 三重・奈良・和歌山」『方言学講座 第三巻 西部方言』東条操監修 東京堂
- 丹羽一彌ほか（2000）『日本のことば シリーズ24 三重県のことば』明治書院
- 服部四郎（1930）「近畿アクセントと東方アクセントとの境界線」『音声の研究』第3輯 岡書院
- 平山輝男編（1960）『全国アクセント辞典』東京堂
- 和田實（1957）「近畿アクセントに於ける名詞の複合形態」『音聲學協會會報』第71号